

翻刻 渡部寛一郎日記1（明治三十年一月から四月まで）

渡部寛一郎文書研究会

（要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大國由美子・大原俊二・

居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎）

摘要

渡部寛一郎文書は、日記、剪湊吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解説・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記（明治三十年二月から四月まで）を翻刻紹介する。渡部寛一郎が、彼が校長を務めた修道館中学の経営のために、主に東京で活動する様子が克明に記されている。

キーワード：渡部寛一郎 近代 政治 教育 漢詩

【解説】

松江市新雜賀町の原洋二家に伝存する「渡部寛一郎日記」の第一冊には、一八九七（明治三〇）年の二月二日から四月一日に至る京都・東京出張の記事が収められている。ここでは、（一）京都出張の目的である英照皇太后の大喪への参列、東京出張の目的である文部省との折衝および修道館関係者との懇談などその主要内容を示した上で、（二）文部省との折衝について若干の検討を加える。

（一）京都・東京出張の概要

①英照皇太后の大喪参列のための京都市の旅

孝明天皇の皇后夙子（英照皇太后）が一八九七年一月一日午後六時に死去したことは、翌二日付の通牒で宮内大臣土方久元から内閣総理大臣松方正義に知らされた（『公文類聚』第二十一編 明治三十年 卷一）。「山陰新聞」が皇太后の死去を報じたのはその翌日の一三日付であったが、同日、松江市長福岡世徳は、訓令式第壹号で、市立

小学校・私立学校宛に「皇太后陛下崩御遊ハサレ候ニ付本月十二日ヨリ五日間休業スヘシ」と訓令した。これを承けて、「私立尋常中学修道館長渡部寛一郎外職員生徒一同」は、土方宮内大臣に宛て「クワウタイコウヘイカ ホウギョアラセラレ シンラアイタウヒキウノジヤウニタヘズ ツツシミテテウシヲタマツル ヨロシクシツソウヲコウ」(皇太后陛下崩御アラセラレ臣等哀悼悲泣ノ情ニ堪ヘズ 謹ミテ吊詞ヲ奉ル 宜シク執奏ヲ乞ウ)と打電した。また、文部省も、北海道庁府県に宛てた一月一六日付の文部省訓令号外で、「皇太后陛下崩御遊ハサレ候ニ付臣民ノ喪期間公私立学校ニ於テハ左ノ通心得シムヘシ」として「謹慎静粛ヲ専ラトシ深ク哀悼ノ意ヲ表セシムヘシ」など四項目を指示していた(以上「諸令達」(渡部寛一郎文書「816」)。
一月一四日付『山陰新聞』には、島根県第一尋常中学校校長柴田初次郎、教諭西田千太郎、松江市各尋常高等小学校職員総代高木範之丞、島根県尋常師範学校校長和田豊・教諭遠藤民次郎の「天機伺」が掲載され、上記の渡部寛一郎修道館長の電文も翌一月一五日に掲載された。

渡部寛一郎が参列した英照皇太后の大喪には、松江市長福岡世徳も参列しており、二人は大喪後の京都発・大阪行の汽車に同乗している(二月九日条参照)。福岡世徳市長のこの時の京都行の旅は、同人の「公務手帳」で確認できるので、これを渡部寛一郎の旅と対比すると【表1】のとおりである。

二人は一日違いで発松しているが、いずれも京都までは三泊四日の旅であった。しかし、福岡世徳が幕末、旧松江藩士として藩主に随従して上洛して以来通い慣れた出雲街道を利用し、根雨・久世・福渡に宿泊しているのに対し、渡部寛一郎は久世から落合経由で福渡に至る道を進んでおり、根雨の次に落合に宿泊した後、岡山で一泊して京都

【表1】1897年2月の英照皇太后大喪参加の旅 (松江—京都間)

	渡部寛一郎	福岡世徳
第一日	2月2日 午前9時30分 松江発、汽船「米子丸」 午前11時40分 米子着、岡山まで人力車契約 午後3時30分 溝口着、昼食 午後7時 根雨着、油屋宿泊	2月1日 午前7時 松江発 午前10時15分 米子着 午前10時30分 米子発、人力車 午後1時20分 溝口着、住田で昼食 午後1時40分 溝口発 午後5時 根雨着、油屋平重に投宿
第二日	2月3日 午前7時30分 根雨発 板井原小憩、下車して山路徒歩、 山頭茶店小憩、新庄・勝山(小憩) 午後6時30分 落合着、高田屋宿泊	2月2日 午前8時 根雨発 午前11時 伯耆・美作境に達す、俳句2句 午後1時 美甘着、昼食 午後1時30分 美甘発 午後4時15分 久世着、うるしや投宿
第三日	2月4日 午前7時 落合発、西川村小憩 午後1時 福渡村、トヨタ昼食 午後7時 岡山着、三好野花壇宿泊	2月3日 午前7時 久世発 午前11時20分 津山着 午後0時30分 津山発 午後4時50分 福渡着、豊屋投宿
第四日	2月5日 午前7時40分 岡山発、二番汽車 午前11時 姫路着、車中昼食 午後3時過ぎ 入京	2月4日 午前7時 福渡発 午前11時10分 岡山着 午前11時40分 岡山発 午後5時10分 神戸着 午後6時 神戸発 午後8時30分 京都着 遠藤新兵衛方投宿

出典：「渡部寛一郎日記」第一冊(松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵。翻刻・本号)、
福岡世徳「公務手帳」第四冊(松江市北堀町・福岡家所蔵。翻刻『山陰研究』第2号、2009年)

に向かっていた。一八九二年一〇月二一日に福岡世徳がこの経路をとった時は、落合から船で旭川を下り、鹿瀬で上陸して人力車で岡山に向かっていたが（竹永三男二〇一三年）、今回の渡部寛一郎の場合は、米子で人力車を雇った際、「米子ヨリ岡山マテノ契約トシテ直ニ乗車」していること、途中西川村で小休憩をとっていることから、落合から福渡までは旭川を船で下らずに陸行したとみられる。このように、福岡世徳の「公務手帳」と同様、「渡部寛一郎日記」に記された旅程の記録は、その時々々の交通事情と人々の移動方法、道中の地域状況を知る史料となるものである。

②東京での活動の概要

大喪参列の後、一旦大阪に向かい、その後二月二三日に新橋に到着した渡部寛一郎は、東京で次の三つの活動を行った。

その第一は、多数の松江市・島根県・修道館の関係者を訪問し、面談・懇親を重ねることであった。その中で、彼は、二月二八日に上野公園内の三宜亭で開かれた、在京の「修道館関係者、并出身者懇話会」に出席したが、それに先だって神田錦町の工藤写真館で記念写真を撮っていた（本文末写真参照）。この懇親活動は、彼が館長を務める私立学校である進取学館・修道館の卒業生の組織化のためであり、三月一日には「学館同窓会組織二関シ、協議」するなど、卒業生の組織化に動き、三月八日には「修道館同窓会発会式ノ事ヲ議シオス」までにごぎつけていた。

第二に、この在京中、渡部寛一郎は、水産伝習所（二月二三日）、講道館（二月二七日）、華族女学校（三月三日）、立教中学校（三月四日）、高等師範学校（三月五日）、尚武学校・東京女子職業学校（三月一〇日、後者は普請中）、国学院・城北中学校（三月二一日）、士官学

校（三月一六日）、盲啞学校（三月二四日）、立教中学校証書授与式（三月三一日）など各種の学校等を精力的に訪ねていた。私立学校修道館長である渡部寛一郎は、上京中にこれらの学校を積極的に視察し、学校経営・運営・生徒教育の参考として、建物・組織・財務・学科構成や生徒・教職員数等を詳細に記録し、授業参観も行っていたが、この視察は、修道館が私立中学校として文部省から得た認可を維持するための参考資料を得るという意味でも重要な意義をもつものであった。

そして第三に、「認可」を求めて文部省関係者との面会・協議を重ねていた。即ち、二月二五日に「文部省ニ出頭。片山吉則氏ニ面会。学校組織ノ事ニ関シ、商議シテ帰ル。」、三月一日に元文部次官で貴族院議員の久保田譲を訪問（不在）、三月五日には文部省に出頭して片山と「認可願ノ件ニ付協議」し、三月一四日にも「学校ニ関スル書類起草」し、それを持参して文部省の片山を訪ねて協議していた。さらに三月二七日には文部省普通学務局長の木場貞長を「其邸ニ訪ヒ、種々談話」していた。これに関連して、三月一九日には松平直亮伯爵家に安井泉を訪ね、「請願書」に伯爵の捺印を求め、三月二二日にも再訪して「認可請願ノ事ニ関シ協議、不日確答」の約束を得たほか、貴族院議員（多額納税者互選議員）として在京中の田部長右衛門を再々訪問し、三月三一日の面談で「調印ノ承諾ヲ得」て「認可」を確実にしようとしていた。この「認可」の内容は何か、その点を次に検討しよう。

（二）私立中学校修道館長渡部寛一郎の文部省折衝の内容と目的

渡部寛一郎の私立学校経営の経過は【表2】のとおりであった。今回翻刻した「渡部寛一郎日記」第一冊に記載された一八九七年の上京時、渡部寛一郎は私立中学校修道館の校長として、その経営・運営に

【表2】 渡部寛一郎の私立学校経営と中等教育関係勅令の制定・改正

年次	渡部寛一郎の学校経営関連事項	「中学校令」の制定・改正
1883(明治16)年	普通学舎を雑賀町に設立	
1886(明治19)年		4月、勅令第15号「中学校令」公布
1888(明治21)年	10月、普通学舎を閉鎖。11月、田中荘次郎と殿町に進取学館設立	
1890(明治23)年	11月、進取学館と松江義塾(この年3月に園山勇・福岡世徳らが設立)と合併し、修道館設立	
1891(明治24)年		12月、勅令第243号「中学校令」中改正、追加
1896(明治29)年	4月、文部省の認可を得、修道館を私立中学校修道館と改称	
1897(明治32)年	2月～3月、文部省に出頭し、「認可」を折衝	
1899(明治32)年	4月、この年度から毎年、鳥根県より県費補助を受ける。初年度1,250円 6月、第三高等学校大学予科推薦入試資格取得 11月、東京美術学校推薦入試資格取得	2月、勅令第28号「中学校令」(1886年「中学校令」を全面改正)
1907(明治40)年	3月、工業学校新設を計画する鳥根県の要請に応じて修道館を閉鎖。 4月、渡部寛一郎、鳥根県立浜田高等女学校校長就任	
1908(明治41)年	4月、鳥根県立工業学校修道館開学	

出典：「渡部寛一郎文書」、渡部寛一郎編刊『私立中学修道館沿革』1907年、鳥根県教育庁総務課
鳥根県近代教育史編さん事務局編『鳥根県近代教育史』鳥根県教育委員会、1978年により作成

専心、腐心していた。この時期、即ち一八九〇年代後半の私立中学校をとりまく環境は、文部省の認可を受けて中学校として存続するために必要な設置基準の充足(教員構成・生徒数・経費確保など)、学校経営にも直結する中途退学者の多さへの対応、高等教育の拡充の中での上級学校への進学率の向上・確保の必要など、難題が山積していた(深谷昌志一九六九年、国立教育研究所一九七四年)。このような中で、「旧篠山藩主が育英を目的として創設した鳳鳴義塾」、「旧広島藩校の流れをくむ修道学校」は、公立中学校の不足を補うことで中学校として文部省の認可を受けることをめざし、設置基準の充足に努めて、それぞれ一八九九年、一九〇五年に中学校として認可されていた(国立教育研究所一九七四年)。この両校より早く、一八九六年に中学校として認可されていた修道館の場合も、認可を継続するために必要な困難は同じであった。そして、渡部寛一郎は、全国の私立中学校生徒がめざしていたことと同じ三つの方法でこの困難を打開しようとしていたのである。

その第一の方法は、私立中学校に在籍し、卒業するための障害となっていた兵役問題の解決、即ち、在学中の徴兵猶予特権の獲得である。『私立中学修道館沿革』(鳥根県立図書館所蔵)は、今回の上京活動の目的について、次のように記している。

渡部館長は大葬参列後直ちに上京学事を視察し、且本館生徒徴兵猶予に関する認可申請の爲め、主務省に出頭して各地の事情を聞合せ四月一日付を以て右に関する願書を呈出せり、此の出願に関しては伯爵松平家並に当時上京中の田部長右衛門岡崎運兵衛、石橋孫八三氏より多大の援助を得たり、

この記述の具体的内容が、前述した今回の翻刻記事である。修道館の

最大の財政的支援者である在京の松平直亮伯爵に加え（基金三千円の醸出の外、寄付金提供）、帝国議会の第十回通常議会のため在京していた田部長右衛門、岡崎運兵衛らの支援を受けていたのである。

ここに述べられている「徴兵猶予」は、一八八八年の法律第一号「徴兵令」の在学中の徴兵猶予に関する規定に関するものであった（以下の「徴兵令」の条文は、一八八九年の法律第二十九号、一八九三年の法律第四号、一八九五年の法律第十五号による改正後のもの）。

第十三条 満十七歳以上満二十八歳以下ニシテ官立学校小学校及中学校ノ別科ヲ除ク等府県立師範学校中学校若クハ文部大臣ニ於テ中学校ノ学科程度ト同等以上ト認メタル学校……ノ卒業証書ヲ所持……スル者ハ志願ニ由リ一箇年間陸軍現役ニ服スルコトヲ得……

第二十三条 第十三条第一項ニ掲クル学校ニ在校ノ者ハ本人ノ願ニ由リ満二十八歳迄徴集ヲ猶予ス……

即ち、「徴兵令」第二十三条の「徴集猶予」の特典を、修道館在生にも適用してもらうことについての「認可」を求めていたのである。「渡部寛一郎文書」中の「明治三十八年度以降 徴集猶予ニ関スル在学証明書綴込 除籍通知共」(9-9)は、この「認可」の結果であり、その具体的適用方法を示すものである。

第二の方法は、上級学校への進学機会の確保であった。上記の徴集猶予の「認可」を得るための活動と同年に、渡部寛一郎は、第三高等学校、東京美術学校等への推薦による入学試験受験資格の認定を求めていた。一八九七年五月二六日、島根県内務部長原田越城は、渡部寛一郎宛に「第三高等学校大学予科入学希望者推薦ニ関スル規定」(同科の「概則」)を通牒していたが、これを承けて渡部寛一郎は、第三高等学校長折田彦市に申請し、六月に承認されていた。同様に申請し

た東京美術学校についても、一〇月二三日付で岡倉寛三校長から、読書・作文・数学・地理・歴史・理科・外国語の試験は免除し、「実技ニ関スル試験ハ当校ニ於テ施行可致」という条件で承認を得ていた(以上、「高等学校美術学校東京郵便電信学校連絡一途」(7-46))。第三に、経営の財政基盤を確保するため、県費の補助を求めて請願を行い、一八九九年五月に至って、翌年度に初めて一二五〇円の補助を受けたことである(「明治三十拾老年以降 補助請願一途」(1-11))。この県費補助は、「渡部寛一郎文書」中に残る多数の受領簿が示す寄附金とともに、修道館の経営を支えていたのである。

原洋二氏所蔵の「渡部寛一郎文書」は、これまで翻刻・紹介してきた若槻礼次郎をはじめとする書簡類、漢詩とその関係文書など多岐にわたるが、教育関係文書中には、私立中学校修道館の創立から閉校までの教育、教職員と学生、学校運営、図書、財政等々に関するあらゆる文書が残されている。それらは明治期の私立中学校の歴史的・教育史的研究の好個の史料であり、今後の活用・研究が期待される。「私立中学修道館沿革」については、内田融氏のご教示を得た。

〔参考文献〕

国立教育研究所編『日本近代教育百年史』4、財団法人教育研究振興会、一九七四年
島根県教育庁総務課島根県近代教育史編さん事務局『島根県近代教育史』第一巻、島根県教育委員会、一九七八年
竹永三男『初代松江市市長福岡世徳 その旅と松江振興策』(山陰研究ブックレット2)、今井出版、二〇一三年

深谷昌志『学歴主義の系譜』黎明書房、一九六九年

(竹永三男)

〔翻刻 渡部寛一郎日記 (明治三十年)〕

《一八九七年二月二日〜四月一日》

〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」(松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵)から渡部寛一郎日記(明治三十年二月二日から四月一日)を翻刻した。

明治三十年二月二日

御大喪参列入京略記

二月二日

一、原本は、緑色の革表紙の手帳で、横約一一・〇センチ、縦約七・五センチ、縦書き罫線付き、一頁十二行である。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、読みやすいよう句読点を附した。句読点の付け方には統一的な基準はない。原文にまれに読点が付けられているが、必ずしも一致しない。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、「」を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、訂正前を示したり、注記をしたりした。

一、本文の文字サイズは同一とした。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追いつ込みとした。

一、適宜【】または*を付して注記を補った。

午前九時半松江発。解纜。汽船船米子丸に乗込。午前十時四十分米子着。同行者、尋常師範学校長和田豊、第一尋常中学校長柴田初次郎両氏。外二師範生西沢金助、中学生中村了二名トス。米子ヨリ岡山マテノ契約トシテ、直ニ乗車。溝口駅ニテ、昼飯ヲ喫ス。三時半頃ナリキ。根雨駅七時過着。一泊。油屋方ニテ。此日此曲一回ノ微雨アリ。黄昏ニ近クニ従ヒ、雨ヤ風殊ニ甚シ。稍悪寒ヲ覚フ。

二月三日

午前七時半、根。雨。発。板井原小憩。夫ヨリ下車シテ、徒歩山路ニ向フ。凡一里半、山頭茶店小憩。新莊ヲ経テ、勝山ニ至ル。小憩。落合着。一泊。午後六時半頃、高田屋。此日、冬末ニシテハ、尤好天気。板井原ヨリ、新莊ニ至ル間、尚且一点ノ雲ナシ。只路傍最高峯ノ一半ハ稍難行トス。又此日尤僥倖ト謂フヘキハ、恰旧曆正月二日ニ相当スルヲ以テ、村落一般休業。故、途上一個ノ牛馬ニ逢ハス。車行ノ便ナルコト、是ナリ。車夫等ノ云フ所ニヨレハ、此季節ニシテ此天気、此朝路ノ好キコトハ近年知ラサル所ナリト。

二月四日

七時前発。西川村小憩。(午後一時)福渡村ニ着。昼飯ヲ喫ス。一酌相催シ、興味殊ニ甚シ。妙味筆外ニ溢ル。宿号トヨヤ。午後七時岡

山着。三好野花壇ニ投ス。此日、天気半晴。金川ヨリ、岡山ニ至ル間、時々微雪ヲ催シタレトモ、暫時ニシテ全晴。

二月五日 好晴無風

午前七時四十分、即ニ番汽車ニテ、岡山発。十一時姫路着。車中昼飯ヲ喫ス。三時過入京。此夜沢ノヲ訪フ。

二月六日 好晴

第三高等学校ニ至リ、諸事打合ヲ為シ、帰り路疎水工事ヲ一見。夫ヨリ諸所遊覽。祇園町辺ニテ牛肉店ニ入り昼飯ヲ喫ス。同行者、和田、柴田両校長ト、三人ナリ。

二月七日

午四時御苑内拝観席ニ参集。六時、御出棺。拝観終リ、七時過キ帰宿。

同日八日 好晴

午前滋賀県知事籠手田氏ヲ、聖護院町ニ番戸、高橋正直方ニ訪フ。暫時談話、帰宿。午後三時四十分、汽車ニテ、同行者一同ト帰途ニ就キ、七条停車場ニ至ルモ、混雑ノ為メ、同行者ト互ニ見失ヒ、且大坂行汽車ナキ為メ、再ヒ旅宿ニ帰ル。

二月九日 好晴

第二番、即午前六時四十分發汽車ニテ、岡本、福岡両氏ト同乗。大坂ニ下ル。福岡ハ岡山ヘ直行。岡本ト共ニ下車。岡本ト相別レテ、善繼方ニ至ル。

二月十日 半晴雨ナシ

午前九時發ニテ、神戸ニ至リ。中村稻造、段塚平太郎両氏ヲ、郵便局ニ訪ヒ、談話暫時ニシテ別レ、下山手通七丁目二十二番戸、山崎光享方ニ至リ、昼飯ノ饗応ニ預リ、黄昏大坂ニ帰ル。

二月十一日 好晴風寒シ

此日、山崎氏ヲ、西区京町堀上通り五丁目、大寺亀太郎方ニ訪。一酌ノ饗応ニ預リ、對話三四時間ニ亘ル。

二月十二日 好晴

此日、大坂發。静岡ニ至テ、一泊。途上、京都ニ近クニ從ヒ、夜來微雪ノ積ムヲ見ル。彦根ヨリ関原辺、積雪殆ント一尺。時々、微雪ヲ催シタレトモ、半陰半晴ノ天気トス。大垣辺ヨリ、漸次稀少ニシテ、木曾川辺ヨリ、全ク雪痕ヲ見ス。天気晴朗春半ノ如シ。唯余寒料峭ヲ覺ユルノミ【料を山偏に誤る。今正す】。投宿、五時十分トス。宿屋機陽館ト称ス。中等ノ宿屋也。矢田ニ打電ス。

二月十三日 好晴

五時四十分、静岡發。十二時四十分過、新橋着。同所ニテ、謙一郎宛安着ノ旨打電ス。矢田氏來迎、共ニ車ヲ命シ、同氏宿所、神田南神保町十四番杵野方ニ投シ、滞留中矢田ト同宿ニ決ス。松江發小包物忒個、并高橋、福岡両氏郵書先着。開封一見ス。謙一郎宛安着ノ郵書ヲ發。此夕、柴田柴一郎氏來訪。一談後鼎坐、久闊ヲ叙シテ、対酌、大ニ途上ノ勞ヲ慰ス。矢田同僚北条大洋氏來ル(福井県人)。池田弘氏モ亦來訪。

二月十四日 好晴

午前早々、雪吹敏光氏來訪。矢田氏ト三人同伴。京橋区加賀町一丁目、岸清一氏ヲ訪フ。同氏、渡米ノ拳アリ。來十六日、出發ス、伝聞スルニ拠リ、先之ヲ訪フ。對話一時間余、麦酒ノ饗応アリ(出發ハ、都合ニヨリ、來月六日ニ延期スト云)。同氏方電話機ヲ使用シ、野津金之助氏ニ面会ヲ求メタレトモ、差支ノ由ニ付、他日ヲ期ス。岸氏ヲ辞シテ、便路、志立鉄次郎氏ヲ訪ハントス。途中、外務省側辺ニテ邂逅、數語ヲ交へ、他日ヲ期シテ、相別レタリ。帰路、松木牛肉店ニ投シ、

昼飯ヲ喫シ、了テ矢田氏ト別レ、雪吹氏ト同伴、榎謙次郎氏ヲ、小石川指ヶ谷町百四十番地寓所ニ訪フ。対談式時間余、共ニ久闊ヲ叙ス。葡萄酒ノ饗応アリ。尚、緩談ハ他日ヲ期シテ辞帰ス。時ニ黄昏。此夕、濱田俊三郎、松崎藤一郎両氏来訪。一酌ヲ催シテ、共ニ久闊ヲ叙ス。

二月十五日 陰

午前九時、車ヲ駆テ、伯爵松平邸ヲ訪フ。先、邸内安井泉氏ヲ訪ヒ、談話数刻、抹茶ノ饗応アリ。去テ、隣家ナル、山口亮氏ヲ訪フ。同氏不在、令聞ニ面会。談話数刻、互ニ久闊ヲ叙ス。又抹茶ノ饗応ニ預ル。后、伯爵殿ヲ訪フ。伯爵、稍不例ニ付、面謁ハ他日ヲ期ス。使者ノ聞ニ於テ、家従村上氏終始接待、先、茶菓ヲ饗応セラレ、後、昼食ノ饗応アリ。適、山口氏帰来。互ニ久闊ヲ叙シテ、談話数刻。新旧緩話ハ、他日ヲ約シテ辞帰。時正ニ二時前トス。帰来後、舎長、渡部福太郎氏ニ、郵書ヲ発ス。足羽氏ニモ発信ス。無端、佐々木儀一郎、宍道政一郎両氏来訪。尋テ、神門喜藏亦来ル。此夕、成瀬民之丞氏来訪。雪吹氏亦来ル。談話数刻ニシテ、四人同伴、散策ヲ試ミテ帰ル。九時過トス。

二月十六日 曇

此朝佐藤球、同榎、曾田甚、三成ノ四氏ニ発郵ス。尋テ、石橋喜市、高城権八、和田豊(書中柴田連名宛)、中村書記四氏ニ発郵ス。午後三時頃ヨリ、車ヲ命シ、清水彦五郎、若槻礼次郎二氏ヲ訪問。共ニ不在。夫人ニ面会。互ニ久闊ヲ叙シ、談話各一時間弱。他日ヲ約シテ辞帰。正ニ黄昏。此夕、水谷京四郎、樋野兼敬、山本義太郎三氏ニ、矢田同僚、永野耕造(福島県人)氏来訪。一酌相供ス。

二月十七日 晴 風寒

午前九時過ヨリ、矢田ト同伴、下根岸町目次忠之助氏ヲ訪問。互ニ久闊ヲ叙ス。偶、山口亮氏工場巡視。更ニ談話時ヲ移シ、共ニ昼飯ノ

饗応ニ預リ、老時過辞帰。帰途、根岸町岡野店ニ至リ、汁粉試喫ス。府下ニ有名ナルヲ以テ也。帰途、更ニ上野公園ニ入り、動物園ヲ遊覽、湯島天神境内ヲ経テ、帰宿。此夕、内田実来訪。鼎坐談話一酌。榎氏ヨリ、柳橋亀清ニテ、来廿日一酌シタキ旨、申来レリ。

二月十八日 好晴 風寒烈

午前榎氏へ、快諾之旨復書ス。福岡、高橋、伊藤恭三氏ニ発郵。但、福岡書中ニ、梅氏答書封入。此日、午後三時頃ヨリ、松原新之助、片山吉則二氏ヲ、其邸ニ訪フ。松原氏在宿。互ニ久闊ヲ叙シテ、談話時ヲ移ス。片山氏不在。令嬢幸子、丁寧接待ス。我県女子師範校卒業ニシテ、旧識アルニヨル。帰途、恰、砲兵工廠ノ側ニテ、片山氏ニ邂逅。他日ヲ期シテ、別ル。此夕、雪吹氏来訪。

二月十九日 曇 無風 黄昏ヨリ降雪

午前、嘉納治五郎氏ヲ其邸ニ訪フ。談話数刻。邸内、柔術道場アリ。講道館ト称ス。其術科ハ、専ラ衛上ノ学理ヲ参酌シテ、古風ヲ変換シタル者ト云。同氏ノ創意ニ係。他日実見スヘキヲ約シテ、退出。帰路、滝川亀太郎氏ヲ、其邸ニ訪フ。共ニ久闊ヲ叙シ、談話数刻ニシテ帰ル。氏ハ、旧ニ依リ、実着勤勉、著作ニ余念ナキモノノ如シ。座右、典籍ノ散乱ヲ見ル。午後四時ヨリ、山口亮氏ヲ其邸ニ訪フ。晚餐ノ饗応ニ預リ、且酌ミ且談シテ、十時過帰宿。謙一郎書状着。此日、目次忠之助、蒸菓子一箱持参。其他、山本邦之助氏、永野武三郎、成瀬民之丞諸氏来訪シタルモ、不在ニテ共ニ面会セス。

二月廿日 曇

夜来降雪アリ。堆積、凡ソ五寸余。満城皚々タリ。今曉六時前後、地震アリ。凡ソ五六分時間。壁土稍散落ス。此日、謙一郎ニ復書、并学館中村氏ニ発郵ス。おまき信書着。此日、柴田、永野三郎、雪吹三

氏來訪。午後五時ヨリ、榎氏ノ約ヲ踏テ、柳橋亀清ニ至ル。且酌且談シ、加フルニ校書ノ興ヲ助クルアリ。夜半帰ル。

二月廿一日 快晴 無風

此日多田房之助氏來訪。数刻談話。更ニ他日ヲ期シテ帰ル（同氏ハ和田氏ノ紹介ニヨル）。其他、柴田、雪吹、池田、尾川又二郎、広江、樋野諸氏來訪。為メニ終日外出セス。柴田氏トハ昼飯ヲ喫シ、広江、樋野ニ氏ト晩酌ヲ共ス。此夕、松原新之助氏ヨリ、明廿二日、午後五時、日本橋区亀島町借楽園へ招待書來ル。直ニ承諾ノ旨復書ス。

二月廿二日 半晴

高橋氏信書着。直ニ復書ス。曾我部道夫、横濱ナル中山弥一郎ニ氏ニ、発郵。渡部福太郎信書着。午後謙一郎宛、并松本萬之助氏ニ発郵。永野辰子來訪。茶菓ヲ惠マル。尋テ、井上留五郎氏來訪。永野氏トハ談話尽キサル為メ、他日ヲ期シテ別ル。午後五時ヨリ松原氏ノ約ヲ踏テ、日本橋区亀島町借楽園ニ赴ク。郷人雨森兼太郎氏、先在。三人鼎坐、支那料理ノ饗応ニ預ル。其目錄別紙ニ在リ。

二月廿三日 曇

午前、雪吹氏來訪。同伴、水産伝習所ヲ參觀ス。松本、武部両氏來訪。亦同伴參觀（同所ハ芝区三田ニ在リ。私立ニ係ル。松原氏所長タリ。初年級、四十八名。動物学ヲ教授。二年級、七十名。松原氏養植科ノ教授ヲ見ル。三年ハ実科トシ、各組二分テ養魚、漁□、罐詰、制蠟等ニ従事ス）。帰途三人ヲ伴ヒ、松田楼ニ至リ、一酌昼飯ヲ喫ス。京橋区二三人ト別レ、徐々散歩ノ后、竹川町花月楼ニ至ル。志立氏ノ案内ニヨル。同席者園山、雨森、成瀬、清水彦五郎四氏。偶、岸、若槻二氏同楼ニ在リ。亦來席。談新旧ニ涉リ、興ヲ尽シテ帰ル。都間氏信書入手。此日來訪者、前三氏ノ外、野津金之助、樋野兼敬、山本邦之助

三氏。外出中、共ニ面会セス。

二月廿四日 快晴

午前、有田義資氏ヲ其旅宿ニ訪フ。途上、桑谷武一郎、鈴木録之助氏ニ邂逅ス。午后、明治義会主、塩谷吟策氏ヲ其邸ニ訪フ。不在ニテ面晤ヲ得ス。黄昏ヨリ、矢田、成瀬二氏、同伴、若槻氏ヲ其邸ニ訪ヒ、酒肴ノ饗応ニ預リ、一酌一談、時ヲ移ス。偶、岸氏來訪、坐興転多シ。酔ヲ尽シテ帰ル。

二月廿五日 半陰半晴

午後、松平直平殿ヲ其邸ニ訪フ。不在、面会ヲ得ス。家扶谷末氏ニ面会。茶菓ノ饗応ニ預リ、更ニ他日ヲ約シテ退出。此日、朝、小包着。夕方、千代子書状着。帰途、転シテ文部省ニ出頭。片山吉則氏ニ面会。学校組織ノ事ニ関シ、商議シテ帰ル。此夕、宍道政一郎、柴田二氏來訪。談話数分。柴田氏ノ發意ニテ、小川町肉店常盤楼ニ至リ、一酌ス。福岡氏信書入手。曾田氏ヨリ來電入手。午後十一時過。

二月廿六日 晴

朝、千代子、并佐藤球氏信書入手。曾田氏ニ返電、且發郵。足羽仲次郎、校僕二人信書着。午前、園山、石橋二氏ヲ其旅宿ニ訪フ。談話数刻。石橋氏方ニテ、昼飯ノ饗応ニ預リ、長尾義勝氏、偶來訪、同坐一酌。同氏ハ北海道小作人募集用務ノ為メ出京スト云。長尾氏ト相携テ、議院ニ至リ、傍聴ヲ求ムルモ、満員入ルヲ得ス。同氏別レ、岡崎氏ヲ其旅宿ニ訪モ不在。転シテ野津金氏ヲ東洋汽船会社ニ訪フ。談話数刻。相携テ、其近傍西洋料理店ニ入り、共ニ晚餐ヲ喫シテ帰ル。此日來訪者永野、井上両女子、并樋野兼敬、上代謙藏、羽田重信諸氏トス。樋野氏ヲ除ク外、不在中、共ニ面会セス。井上、永野女子、各菓子箱持參。

二月廿七日 快晴

此日、中村書記郵書規則書着。午后、矢田同伴、永野辰子ヲ其旅宿ニ訪ヒ、談話數時。帰途、嘉納氏講道館ニ至リ、諸生実習ヲ見ル。同氏不在、会面談セス。此夜、地震アリ。

二月廿八日 晴 無風

午前、中西兼太郎、渡部福太郎書状着。柴田柴一郎氏来訪。午時過、歸ル。此日、午後ヨリ、修道館関係者、并出身者懇話会ノ約アリ。諸氏来宿、共ニ、先、錦町工藤方ニ至リ撮影シ、後、上野公園内三宜亭ニ於テ開会。会スル者、余ヲ併セテ十七人。茶菓ヲ喫シテ、快談時ヲ移ス。点灯后ニ至テ散会。此日木村兵之助来訪。

三月一日 晴 風寒シ

午前、井上哲次郎氏ヲ其邸ニ訪ヒ、共ニ久闊ヲ叙シ、對話數刻。更ニ他日ヲ約シテ別ヲ告ク。同氏講論集、并巽軒詩集ヲ惠与セラル。帰途、久保田讓氏ヲ其邸ニ訪フ。不在、面晤セス。午后二時ヨリ、旅宿ニテ、広江、雪吹、上代、羽田、樋野諸氏參集。学館同窓会組織ニ関シ、協議。十時過ニ至ル。諸氏ニ晚餐、且一酌ヲ饗ス。此日、内田実、神門喜藏ニ氏来訪。

三月二日 陰天 微雨

○午前、中西、足羽、二氏ニ復書。三谷権太夫氏ニ発郵。○佐藤榊氏信書着。○午后岸清一、恒松、岡崎三氏ヲ其寓所ニ訪フ。皆不在。歸リ、更塩谷吟策氏ヲ訪フ。学校事情業ニ関シ、快談、殆二時間。他日ヲ約シテ歸ル。氏ハ豪放闊達、一個ノ快男兒ナリ。共ニ語ルニ足ル。三月三日 快晴

○福間啓氏信書着。○大坂、善繼ニ発郵。○午前、松平邸ヲ訪問。安井家扶ニ面会。基金増加願書ヲ以テ、懇談時ヲ移シ、午餐ノ饗応ニ

預リ、一時退出。伯爵微恙尚療エス。面会セス。○帰途、麴町区永

田町ナル華族女学校ヲ參觀ス。同校教員淺岡初、秋山四郎二氏ハ旧知ナルヲ以テ、先、刺ヲ通シテ二氏ニ面談。教場係ノ案内ニテ、各室ヲ巡視ス。構造ノ壮大、設備ノ完全ナルコト、帝室直轄ノ学校ニ愧チス。一年経費、貳万六千円。帝室費ヨリ支給セラレ、授業料ハ一円以上三

円、生徒各自ノ随意トス。授業料ハ別途積立トシテ、目下殆ント五万円ニ達スト云。○学科程度ハ、小学部、尋常、高等二分チ、各三等級、通シテ六年、中学部モ、初等、高等二分チ、各三等級、通シテ六年、小学ヨリ中学ヲ通シテ、十二年トス。別ニ、付属トシテ幼稚園アリ。児女、惣員四十余名。中小学部共、各惣員貳百余名。全体、惣員五百名弱ナリト云。○授業ハ、最上級、下田歌子ノ家政学、高中三級、

土屋弘漢文科、初中三級、秋山四郎漢文科ヲ見ル。其他、習字、作文、体操等ヲ見ルモ、特書スヘキコトナシ。此夕、山口亮、目次忠、武田善三氏来訪。外出中、共ニ面会セス。夜二入り、成瀬氏、樋野敬二氏、来話、時ヲ移ス。

三月四日 快晴

○桜井馬太郎ニ発郵。○午前、岸氏ヲ訪フ。面談。帰途、築地立教学校ニ至リ、管理者兼教頭、早乙女氏ニ面会。同氏ハ、余ト旧アルヲ以テ、懇待、各室ヲ案内ス。生徒惣員、八十余名。校舍構造ハ半途ナレトモ、基模広大、特ニ生徒寄宿舎ノ如キハ、一室一名ニシテ、六十名ヲ容ルニ足ルト云。過半西洋的ノ装置ナリ。専修科ノ独語、中学部三級英語、同ニ級漢文ノ授業ヲ見ル。○帰途、転シテ、衆議院ニ至ルモ、休会、傍聴ヲ得ス。更ニ転シテ、岡崎氏ヲ其旅宿ニ訪ヒ、數分談話ノ后、増山正直上京ヲ聞キ、帰途、其旅宿ヲ訪フモ、不在。名刺ヲ留テ歸ル。○四時ヨリ約ヲ踏テ、明治義会主、塩谷吟策氏方ニ至

り、開襟快談ヲ移シ、晚餐西洋料理ニ預リ、十時過帰宿。此夕、柴田氏来訪、面会セス。

三月五日 陰 タヨリ風寒

○午前、伊藤久次郎氏来訪。判事トシテ、熊谷裁判所ニ在リ。帰任ヲ急キ、更ニ他日ヲ期シ、談話数分ニシテ別ル。○中西氏ニ発郵。但設備ニ関スル書類ノ件ニ付。○文部省出頭。片山氏ニ面会。認可願ノ件ニ付協議ス。高崎均氏ニ面会ヲ求メ、他日緩話ヲ約シテ別ル。氏ハ旧識者ニシテ、普通学務局ニ出仕ス。【○から○へ続く】○中村書記ニ発郵。卒業生状況一件。○午後高等師範校ニ至リ、校長嘉納治五郎氏ニ面会。中学部ノ參觀ヲ求ム。理事宗像氏ノ案内ニテ、教室ニ至ル。放課ニ近キヲ以テ、授業參觀ハ他日ヲ約シ、応接室ニテ同氏ト談話。現況ヲ尋テ帰ル。此夕、片山氏ト約アリ。同氏宅ニ至リ、晚餐ノ饗応ニ預リ、夜深ニ至リ帰ル。○此日、来訪者、柴田、佐々木儀一郎二氏トス。○善継書信着。

三月六日 快晴

午前、岸氏洋行見送トシテ、新橋ニ至ルモ、既ニ発車后ニテ、矢田ト同伴、後車ニテ横浜ニ至リ、旅宿西村ニテ面会。他ノ見送者ト共ニ昼餐ヲ喫シ了テ、郵船会社ノ小蒸汽船ニ同乗。岸氏ノ旅行船ナル英国船（カプチック）号ヲ一覽シ、上陸后、諸氏ト別レテ、清水彦五郎氏夫婦、矢田三氏ト、居留地ヲ逍遙シ、（グラントホテル）ニテ小憩、茶菓ヲ喫シ、更ニ散策数十分ニシテ、再ヒ西村屋ニ至リ、岸氏ニ別ヲ告ケ、共ニ晚餐ヲ喫シ、七時発汽車ニテ、新橋ニ帰ル。同乗者、清水夫婦、山本邦、矢田四氏トス。清水夫婦ニハ新橋ニ別レ、三人俤歩。山本氏宿ニテ小憩。茶菓ヲ喫シ、十時過帰宿。此日、中西、曾田、於千代三人ノ郵書着。

三月七日 日曜 午前快晴 黄昏降雨

此日、武部氏ト約アリ。午前、矢田同伴、本庄ヨリ、汽車ニテ国府台教導団ニ至ル。武部、松本二氏、懇待頗ル至ル。先、二氏ノ詰室ニテ小憩后、砲兵生徒隊構ナル下士官俱樂部ニテ、昼餐ノ饗応ニ預リ、和酒、洋酒ノ二品ヲ供シ、四人食卓ヲ囲ミ、且酌ミ且談シ、頗ル快酔、傍ラニ囲棋スル者アリ。酔ニ乗シテ、矢田ト交番技ヲ試ム。亦一興。此日、武部ハ週番ニテ、外出ヲ得ス。門内ニテ別ヲ告ケ、松本氏案内ニテ、練兵場等巡覽。台下ナル弘法寺境内ヲ通過シテ、停車場ニ至ル。時正ニ黄昏。松本氏ト別レ、乗車、帰宿。此日、山本庫次郎氏来訪。他出中、面会セス。此日、足羽、石橋喜市、并学生森啓義外二氏連名ノ郵書着。

三月八日 午前降雨微雨 終日陰

○午前中西、足羽、生徒森氏ニ復書。○午後お千代宛発郵、おまき宛在中。此夜、旧同窓、秋田県人、小湊氏ニ邂逅。相携テ一橋外ナル肉店ニ至リ、対酌、旧時遊ヲ談シテ帰ル。此夜、広江、雪吹、上代、羽田、佐々木、樋野諸氏、旅宿ニ参集。修道館同窓会発会式ノ事ヲ議シテ了ス。

三月九日 微雨 終日陰

午前、足立昇之進氏来訪。此日、春雨霏々、旅窓寂然ニ堪エス。矢田氏モ所勞ノ為メ、欠勤。午前、旅宿ニテ、棋石ヲ弄シ、午后、相携テ、九段坂下ノ勤工場ヲ遊覽シ、了テ同場楼上囲碁席ニ臨ミ、夜ニ入り、表神保町寄席川竹亭ニ至リ、娘義太夫ヲ聞キ散鬱シテ帰ル。中村書記郵書着。

三月十日 陰 午后晴

午前、雪吹氏来訪。矢田氏ト三人同伴、神田錦町錦城学校、尚武学

校ヲ參觀。狀況別冊ニ在リ。午後、順天求合社ニ至ルモ、休業中、參觀ヲ得ス。去テ、一橋通東京女子職業学校ニ至ルモ、普請中、亦觀ルヲ得ス。此夜、飯塚国三郎(講道館三段、矢田ト知己)來訪。晚餐ヲ供ス。尋テ、樋野、柴田、中溝、山本庫太郎諸氏來訪、談話、困暮ニ時ヲ移シテ去ル。福岡啓太郎氏郵書着。

三月十一日 晴 風寒

午前、中西氏郵書着。教員関係ノ事。飯田町国学院ニ至リ參觀。主事青戸波江、同郷人ノ故ヲ以テ、懇待頗ル至ル。一年生、團文軒徒然草、三年生、貞永式目ノ教授ヲ見ル。二年生、休課中ナリ。了テ、応接所ニテ、青戸氏ト談話數十分。同氏ノ紹介ニテ、城北中学校ニ至リ、一校長今泉氏ニ面会。談話二時ヲ移シ、后、四年生代數、一年生国文科ノ教授ヲ見テ帰ル。同校ハ目下国学院敷地内ナル建物數棟ヲ仮用セリ。去ル廿一年ノ設立ニシテ、今日ニ至ル。維持上種々困難ノ事情ハ、略我カ修道館ト同一轍ニシテ、校主其人ノ境遇亦略相同シ。此夕原喜代太、浜田、小畑、諸氏來訪。談話夜深ニ至ル。此日中村書^{〔冠服之〕}ニ発郵ス。松平家扶ヨリ、来十三日、伯様御面会被致度ニ付、来邸スヘキ旨申來レリ。

三月十二日 陰 余寒甚シ

午前、弘道會長西村茂樹先生ヲ其邸ニ訪ヒ、面話數分時、先生円顏白髭、軀幹長大、老健ノ好翁ナリ。談話懇到、能ク後進ヲ待ス。帰途、桶田魯一氏ヲ其邸ニ訪フモ、不在、面会セス。

三月十三日 晴 風稍寒

午前、松平伯ヨリ招カレ、同邸訪問、伯爵ニ面会、談話ヲ時ヲ移シ、午餐ノ饗応ニ預リ、一時過、退出。車ヲ命シ、三村氏ヲ其邸ニ訪ヒ、面話數分時ニシテ辭シ、信濃町ヨリ、汽車ニ搭シ、飯田町ニ帰り、途上、

成瀬氏ヲ訪、一酌相催シ對話。浜田氏モ亦歸來。別ニ麦酒ト肴ヲ饗セラレ、三人鼎坐、且酌ミ且談シ、晚餐ヲ喫シテ帰ル。此夜散策、永野辰子ヲ其寓ニ訪問。十一時頃、帰宿。此日、中村書記發書類着。

三月十四日 晴 風穩

午前、学校ニ関スル書類起草ス。來訪者、前田実、木村兵太郎、穴道政一郎、樋野諸氏來訪。午后、起草書携テ、片山氏訪問。種々協議修正。帰テ、更ニ田部氏ヲ麴町平河町ニ、石橋氏ヲ芝佐久間町ニ訪モ、共ニ不在。此夜、横地正助、樋野二氏來訪。

三月十五日 終日小雨

午前早々、石橋氏ヲ訪ヒ、認可請願ニ関シ、同意ヲ求メ、帰途、岡崎氏ヲ訪ヒ、同様依頼。午後、衆議院傍聴。此日、重要ノ議事ナシ。二時間余ニ帰り、請願書類調査ス。此夕、長野^{〔本〕}耕造、樋野、雪吹、中溝、諸氏來訪。

三月十六日 午前微雨 后晴

此日、三村氏ノ紹介ニヨリ、工兵少佐大木氏ト士官学校參觀ノ約アリ。氏ハ同校員築城学科長トス。即、午前八時、車ヲ驅テ出頭。少佐先在リ。詰室ニ案内迎接供茶シ、談話ノ后、校内ヲ案内巡視。第一、第三、第十一講堂ニ於テ、築城学中地形学及架川法、第二、第二十六講堂ニ於テ、戦術学ノ教授ヲ觀ル。了テ、大木少佐同伴。幼年校ニ至リ、先、校長ニ面シ、暫時談話。后、同校副官ノ案内ニテ、校内巡視。第一年生、日本歴史(藤原時代)、第二年生、化学、第三年生、物理学ノ教授ヲ觀。了テ、再ヒ士官学校ニ帰り、小憩。校長隣室、將校応接所ニ於テ(大木少佐接伴ニテ)昼飯ヲ饗セラル。仙波砲兵中佐、馬淵工兵少佐モ亦来接。共ニ氣宇快闊之人。仙波氏ハ同校戦術学科長、馬淵ハ兵器学科長トス。午后一時ヨリ、乗馬、測量、器械体操等ノ練

習ヲ觀ル。幼年校生徒モ傍ラニ於テ、乗馬、体操ノ練習ヲ為スヲ觀ル。了テ、校長ニ面話數分。三時頃、帰宿。大木少佐ハ余力ヲ為メニ事務ヲ排除シ、終始同伴案内ノ勞ヲ執レリ。懇篤周到、深ク其好意ヲ謝ス。此日、雪吹氏、午后ヨリ来宿、請願書類浄写ノ勞ヲ執ル。来訪者、樋野、宍道、野津信保、曾田恒二諸氏トス。曾田氏、舍弟遊学ノ件ニ就キ、協議依頼セリ。此日、中西氏郵書着。

三月十七日 陰 此夕中西氏ニ復書ス

午后、松平伯爵ノ紹介ニヨリ、華族会館ニテ開設セラル、同族方ノ組織ニ係ル旧交會ニ出席、傍聴。嘉納治五郎氏（国民一致国力増進最上策）ト云題ニテ、講話ニ時間ニ渉ル。頗ル時勢ニ適切ナルヲ覺フ。其概日

(1) 我国現状ニ就キ、戦后抱負、心ノ増進シタル事。

(2) 然トモ、其実力ハ欧米ニ比シテ劣ル。海軍ノ如キ、陸軍ノ如キ、又其勞動ノ程度（女子一日賃金、日本ハ十六、欧米ハ壹円）、学問技芸ノ程度、間勝ル点ナキニ非ラサルモ、概シテ劣ル事。

(3) 然ラハ、如何ニシテ可ト云フニ、各人各個ノ精力ヲ増スヲ要ス云。

(4) 精力ノ解釈。智徳体ノ上ニ引証シテ、成ルヘク精力ヲ減損セスシテ、増進セシムル心得。

(5) 右、至難ノ事業ナレトモ、至難トシテ着手セサレハ、成功ノ期ナシ。（意志ノ在ル所必ス方法アリ）

三月十八日 晴

此日、西田氏凶問。中西、西田、謙一郎三人ヨリ、同時申越ス。中西氏ニ復書。西田氏ニ電信ト郵書ト二様ニ弔詞ヲ發ス。午前九時、飯田町停車場ニテ、堀正太郎氏ニ偶然面會。同氏モ松平家ニ要談アリトテ、同乗。松平家訪問。伯爵并家扶、兩人共外出中ニテ、茶菓ヲ喫シ、

田中家從ノ案内ニテ、園内楝花ヲ一覽シテ退出。再ヒ堀氏ト同乗、帰宿。共ニ昼飯ヲ喫シテ、別ル。偶、井上千代野子来訪。暫時談話后、共ニ旅宿近辺ヲ散歩シ、三崎坐ナル女俳優ヲ一見シテ、帰宿。此夜、成瀬氏来談。

三月十九日 微雨 稍余寒ヲ覺フ

午前八時、松平家訪問。請願書調印ノ件ニ付、安井氏ニ面會。書面ヲ托シテ帰ル。午后、樋野敬氏来話。此夜布野^{（素劣）}秦藏（吾助養子）来訪。此日、柴田中学校、片山、高城権八三氏ニ発郵。

三月廿日 微雨 余寒甚シ

午前、成瀬、武部、中山貴林、布野、宍道諸氏来訪。中山氏ニ昼飯ヲ供シ、且同酌ス。午后、矢田、布野、宍道、中山諸氏ト撮影。後、矢田同伴、上野公園三宜亭ニテ開設スル、出雲学生会ニ臨席。黄昏退席（此日関根、浅井ニ発郵）。帰途、山本邦氏ノ好意ニテ上野公園前ナル青陽楼ニテ、西洋料理ノ晚餐ヲ喫シ、了テ満腹ニ堪エサルヨリ、三人相携、方途ヲ転シテ、北里近辺ヲ散歩シテ帰ル。

三月廿一日 微雨 余寒尚甚シ

午前、池田弘、多田房之助氏来訪、多田氏昼飯ヲ饗シ、対酌談話ニ時ヲ移ス。午后、松崎、井上留五郎、内田実、成瀬、雪吹諸氏、交互来話。夜間、成瀬、雪吹、矢田三氏ト、神田本通散歩。夜店ヲ一見シテ帰ル。

三月廿二日 陰

午前、宍道氏帰国、告別ノ為メ来訪。午後、松平家訪問。認可請願ノ事ニ関シ協議。不日確答ヲ約シテ帰ル。黄昏ヨリ、多田氏訪問ノ約アリ。至レハ、則晚餐ト酒肴ヲ饗セラレ、開襟対酌、頗ル快ヲ尽シテ帰ル。帰宿後、再車ヲ命シ、塩谷氏ヲ訪問。前ニ借用シタル書類ヲ返

却ス。中溝、山本、長野、北条諸氏来訪。

三月廿三日 陰

午前ヨリ終日、雪吹氏ヲ雇用シ、認可請願書類、調製ニ着手。此夜、池田弘、柴田、成瀬諸氏来話。

三月廿四日 陰 風寒シ

午前、盲啞学校ヲ參觀ス。試験中、授業ヲ觀サルモ、学校内部一ト通、啞生某ノ案内ニテ巡覽セリ。一ト先、帰宿。更ニ、松平直平氏訪問、面会。昼飯ノ饗応ニ預リ、談話暫時ニテ帰宿。高橋氏ニ復書ス。此夕、堀正太郎氏訪問ノ約アリ。黄昏相訪。矢田氏モ亦尋テ至ル。暫時談話喫茶。後、同氏ノ厚意ニテ、王子扇屋ニ至リ、一酌晚餐ヲ喫シ、同所ヨリ、汽車ニテ上野ニ至リ、帰宿。

三月廿五日 晴 風穩

此朝、雪吹氏書類携帶來訪。此日、松崎、矢田諸氏ト、埼玉浦和行ノ約アリ。午前九時、矢田同伴、上野ヨリ汽車ニテ至リ、先、山本庫二郎氏ヲ訪フ。松崎氏先在リ。四人对話対酌、昼飯ヲ喫シ、了テ、千家知事ヲ訪フ。不在。名刺ヲ残シ置キ、更ニ県庁ニ至リ、郷人藤田、山本孝則二氏ニ面会ヲ求ム。藤田欠勤、更ニ監獄ニ至リ、松田氏ニ面会。相携テ同氏官舎ニ至リ、久闊ヲ叙シテ対酌。藤田氏亦至ル。談愈盛ニ興愈深シ。頗ル快ヲ尽ス。矢田、松崎ハ帰期ヲ約シテ、別ニ山本孝則氏方ニテ対酌。八時半、乗車。松田、藤田、山本庫、山本孝四氏送テ、停車場ニ至ル。汽笛一声、相別ル。乗車前、同県書記官、告森良氏ヲ官舎ニ訪フモ、出張不在ニ付、名刺ヲ残シテ帰ル。此夜、柴田、片山、高城三氏郵書着。

三月廿六日 陰雨間断ナシ

午前早々、松平家訪問。后、田部氏訪問。暫時談話。更ニ、千家氏

出張所訪問。既ニ帰任后、不得面晤。帰途、更ニ松崎故一郎氏訪問。昼飯ノ饗応ニ与リ、且一酌ス。了テ、同氏案内ニテ、天文台參觀。諸器械ヲ巡覽ス。此日、陰雨ノ為メ、遠望鏡ヲ使用スルゾ得ス。黄昏、帰宿。此夜、中村準一郎氏ノ復書。中村書記郵書着、中村書記ニハ直ニ復書ス。

三月廿七日 陰雨 福岡氏郵書着

午前、富山房編纂員、遠藤国次郎氏来訪。午后、品川弥二郎氏ヲ其邸ニ訪ヒ、喫茶談話、帰ルニ及ヒ、同氏細書ノ書、小片式葉ヲ恵与セラル。(同氏頻ニ旧家保存ノ必要ヲ説ク。言皆剝切) 去テ、杉浦重剛氏ヲ其邸ニ訪フモ、不在。更ニ、普通学務局長、木場貞長氏ヲ其邸ニ訪ヒ、種々談話ノ后、黄昏帰宿(同氏、女子教育ニ就キ保守、進歩折中論ヲ主唱ス) 此夜、小畑少尉来話、一泊。

三月廿八日 陰雨

此朝、小畑豊之助氏ノ為メ、膳上一酌ヲ催ス。午前十時頃ヨリ、野津金氏、保々三九郎二氏来訪。共ニ昼飯ヲ饗シ、且一酌ス。午后、柴田、成瀬、山本庫太郎三氏来話。黄昏ヨリ、成瀬氏ト相携テ、川上坐ニテ興行中活動写真ヲ一見ス。中西教員、学館用端書着。

三月廿九日 少晴

午前中西氏復書、福岡啓、高城氏ニ発郵。佐藤梅氏に発郵。松平、安井、山口宛、子爵家扶谷末、浦和山本庫氏発郵。午后布野秦蔵、雪吹、野津保信、目次、柴田、山本庫太郎、永野耕造、小畑豊之助、佐々木儀一郎。

三月卅日 陰雨

午前、榎氏ノ紹介ニヨリ、木下広次氏ヲ其邸ニ訪フ。出勤前ニ付、本省ニテ面会スヘキヲ約ス。帰途吉岡弘氏ノ遺族ヲ訪ヒ、未亡人、及

遺子九八郎二面会、共ニ久闊ヲ叙シ、酒肴ノ饗応ニ預リ、暫時談笑シテ、帰宿。昼飯后、文部省出頭。木下氏二面会ヲ求ム。局長室ニ延接シテ、懇話時ヲ移ス。私立校ノ短長、訓育上ノ引例（思郷ノ情ヲ使用等）等、種々談話アリ。帰途、内田誠成氏遺族ヲ訪フ。共ニ久闊ヲ叙シ、喫茶談話。后、同氏埋葬地ナル一乗寺境内ニ至リ、墳墓ヲ拜シテ帰ル。三月卅一日 晴 寒風甚

午前、松平邸訪問。安井氏二面会。認可請願書調印之件ニ付、承諾ヲ得、直ニ田部氏ヲ訪フモ、不在。帰途、芝区渡部真太郎氏ヲ訪フモ、亦不在。南鍋町一丁目弘道会事務所ニ至ルモ、役員未タ出頭セサルヲ以テ、名刺ヲ残シ置、一ト先、帰宿。喫飯后、文部省ニ出頭。片山氏二面会。書類打合ヲ為シ、再ヒ田部氏ヲ訪ヒ、面話。調印ノ承諾ヲ得タリ。此夕、立教中学校校長早乙女氏ヨリ、証書授与式ニ案内ヲ受ケ、直ニ参校。式了リ、一ト先、帰宿。更ニ、新任参事官有吉氏ヲ本郷四丁目ニ訪フモ、麹町三番町甘番軒住ニ付、面談ヲ得ス。依テ、明朝訪問ノ事ニ決心シテ、帰宿。時正ニ黄昏。此朝、曾田氏郵書着。此夜、来訪者成瀬、雪吹、布野秦蔵^{（秦カ）}、小畑豊之助四氏。

四月一日 晴 風穩
午前、中郵書記発郵。□□、山田良二氏郵書着。午前、野津金氏来訪。共ニ写影センコトヲ求ム。相携テ九段写真師ニ至、合写。了テ、少時靖国神社境内ヲ徘徊シテ、同氏卜別レ、新任参事官有吉氏ヲ訪フ、不在。車ヲ命シ、下谷区井上留五郎ヲ訪ヒ、昼飯饗ニ預リ、食后、浅草境内ヲ徘徊シ、凌雲閣ニ至リ、眺望。此日、微陰ナルモ、眼界殊ニ闊キヲ覚フ。閣高サ十二階ニシテ、海面ヲ抜クコト、二十二間。同所ヨリ、墨堤、三囲社辺ニ散策シ、帰途、枕橋近辺、養浩園^{（道差）}ヲ一覽シテ、黄昏、帰宿。同園ハ、元佐竹ノ邸ナレトモ、現今、蜂須賀氏ノ別邸タリ。園

内、風致尤愛スヘシ。此夕、来訪者、柴田、山本、雪吹、布野、高橋龍雄、谷清瀬老人、蒲生老母。

渡部寛一郎日記末尾メモ部分

【最終頁より上下さかさまに筆記】

1 2 3 4
5 6 7 8
9 10

（皇朝言行録）

四月例会

○四谷舟町三十三 秋山四郎君

○平河町三丁目十七番浅岡

【倒立】 芝新銭座町 十五番 早乙女

【以下飲食費の清算か？】

□ 3, 10

画 1, 50

□ 4, 71

分 0, 10 | 柴田

0, 30 肉分 和田

0, 16 | 柴田

二日残 二円、五円、三月四朝 壱円

本郷駒込千駄木町百二十五

福田久徳

牛込佐土原町 志立

九番

永井邸内 小湊君

○東京小石川指ヶ谷町百四十番地

梅謙次郎

○神戸下山手通七丁目二十二番

山崎光享

同人大阪宿所

西区京町堀上通り五丁目百十八番 大寺亀太郎方

○京都府聖護院町二番戸 高橋正直方

籠手田氏宿所 □□□

○京都愛宕郡白川

村牧元重方

日野楢太郎

○京都山科隨心院

勝田松太郎

○京都下切通上新烏丸東入四十式番

沢野真造

○京都境町通

本庄太一郎

○東京牛込東五軒町六十七番 村田盾之丞方

余村清次郎

○書記官有田氏宿所

日本橋区鍛冶橋外

中央旅館

○奈良県師範学校

教頭

沢幸次郎

○名古屋市旅宿

多波良

静岡市

上 大東館

中 機陽館

○

○小石川竹早町七十八番地

清水彦五郎

○小石川圃心町金富町四十番地

若槻禮次郎

○小石川牛込表一〇九

井上哲次郎

○下谷区下根岸卅八番

目次忠之助

○本郷区龍岡町十九番

永野辰子

○鈴木録之助氏

麻布区網代町廿四

○嘉納治五郎氏

小石川下富坂町

○杉浦重剛氏

○松原新之助氏

○川上彦次

魏町永田町六番六六

【この部分ちぎられ、表裏を欠く】

○片山吉則氏

本郷菊坂町

○中山弥一郎氏

横濱居留地五十七番

ホール商会ニテ

○松平直平氏 広瀬公

牛込加賀町二丁目

廿一番地

別注文御覚

二月十四日

夕方

一膳部老人前 松崎分

一さしみ一人前 濱田分

一酒 式本

十五日

一人車 一挺 松平家訪問用

但九時より一時卅分迄

一酒壺本

一蒸菓子 壺鉢

十六日

一人車 壺挺 清水 若槻訪問ノ為

但三時頃より五時頃

一膳部老人前 永野耕造

一酒 式本

十七日

一膳部一人前 内田実

一酒 五本

十八日

一酒 式本

十九日

廿日

一人車 二回

但一橋幼稚園卜柳橋迄

酒 式本

廿一日

一菓子 壺鉢

一牛肉 一斤半

一酒 三本

一膳部 三人前

但柴田 昼 広江 桶野

兩人晚餐ヲ供ス

廿二日

一人力車 日本橋偕楽園迄

一口一挺 帰路 三十銭

廿五日

一人力車 一挺 松平直平氏 文部省訪問用

一酒貳本

廿六日

一人力車10

廿七日

一酒 貳本

以上二月末払済

三月一日

一膳部 四人前

一酒 五本

一牛肉一斤

□□屋

一酒 一本

【以下不鮮明。解説不能】

付記

本稿は、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰共同研究プロジェクト

近代山陰の政治と文化―「渡部寛一郎関係文書」・「若槻礼次郎関

係文書」に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して―(課題番号

一六一一 期間 二〇二六～二〇一八年度 代表 要木純一)

及び、

科研費 基盤研究(C)

近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文学と

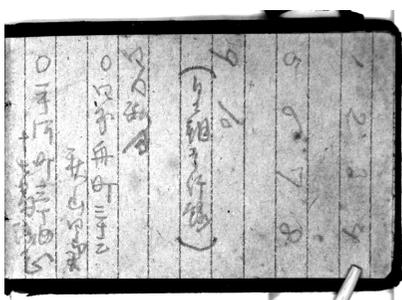
日本史学の学際的研究(研究課題／領域番号 16K02386 期間

二〇一六～二〇一八年度 研究代表者 要木純一)

による成果の一部である。



東京の工藤写真館で撮った、修道館関係者集合写真。
渡部寛一郎は二列左より3番目。日記2月28日参照
(原洋二氏蔵)



日記本文末尾メモ部分
(もとは上下さかさま)



渡部寛一郎日記 (明治三十年)



日記本文冒頭部分

Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou:1897

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

[Abstract]

Watanabe Kanichirou (1854 – 1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1897. Through this diary we can perceive how he as the principal of Shudokan school devoted himself to develop his school and made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats.

Key words : Watanabe Kanichirou, education, Meiji era

翻刻
渡部寛一郎日記1
(明治三十年二月から四月まで)
(渡部寛一郎文書研究会)